
騙し合い

東雲咲夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

騙し合い

【著者名】

東雲咲夜

N7275D

【あらすじ】

ほんの些細な五つの話。信じて、裏切られて。騙して騙されて。何を信用すればいいのだろう。この世界には……嘘つきだらけじゃないか。短い、五つの話です

(前書き)

暇つぶしでもお読みください。

ある恋人の話

「ねえ、紺野君」

「どうかしたの？」 悠美

「聞きたい事があるんだけど、聞いてもいい？」

「もちろんだよ」

「紺野君は、私のこと愛してる？」

「どうしてそんなこと訊くんだい？」 愛してるに決まってるじゃないか

「別にね、理由はないんだけど……何となく」

「何か悠美を不安にさせるようなことしてしまったかな……？」

「ううん。私がちょっと変なだけだよ」

「僕は悠美の事を愛してるよ。心の底から」

……ねえ。どうして紺野君はそんなに優しいの。

どうして私みたいなのが好きになってくれたんだろう。

絶対に、私と彼と同じや釣り合わないのに。

彼は、完璧すぎるよ。

頭も良くてスタイル抜群。馬鹿で醜い私とは大違い。

なのに、私のことを愛してるっていつてくれる。

でもね……不安になるの。彼は、本当に私のことを愛してるのかしら。

消極的な私にいつもさり気無く気配りをしてくれて。

何か辛い事や悲しいことがあると、そつと慰めてくれて。出来すぎてると思うのは……私だけ？

こんなことを考える私がおかしいのかな。

彼が傍に居てくれることだって、贅沢なのに。

そんなに……私に優しくしないで。

そんなに幸せをつに微笑まないで。私……勘違いをしてしまって
うだから。

私は、遊びなんでしよう……きっと。

彼みたいにかつこいい人が私なんて好きになるはずないもの。
なら、彼は私のことを愛していないの……？

つらたえる私を冷静な私が見てる。

ああ、本当は。

私、どうすればいいんだろう。

ある夫婦の話

「何だか、部屋が香水臭くないかしら。あなたはどう思う？」

「ん……？ そういうえば何か匂うなあ。つけすぎじゃないのか」

「何言つてるのよ。あたしが香水使わないので知つてるでしょう」

「そうだつたつけな。消臭剤でも置いておけば」

「またそんない加減なこといつて。まさか 浮氣してるんじゃ
ないでしょうね」

「何変なこといいだすんだよ。俺がもてると思うか？」

「そもそもそうね。……それじゃあなたと結婚した私が馬鹿みた
いじゃない」

「そんなこと俺にいつてもしょうがないだろう」

「はあ……。ほんと、どうしようもないわね」

「……何か言ったか？」

「退屈でしょうがないつていったのよ」

「何が退屈だ。毎日毎日、近所の人と喋りまくつてるだろうが。

俺なんか、男ばかりの職場で毎日汗水たらして働いてるつてい
うのよ。」

「いいじ身分だよな。

俺こそどうしてこんな女と結婚したのかわからんよ。

他にいい女はたくさんいるはずなのに。」

浮氣する気にはならないとは……俺、えらいな。

そんな俺を邪魔者扱いしやがって。まったく。

香水が何だつて？ そんなの知らないって。

俺は香水なんかつけないんだから、あいつが使ってるだけだろ？。

本人は使わないとかいつてるけどな。

じゃなきや、誰の香水なんだよ。

職場から持ち帰つてくるほど、強い匂いでもないだろ？。

香水の匂いなんか気にしてる暇があるならさ、部屋の掃除しろよ。お風呂場の排水溝とかさ。洗濯物は外に干すようにするとか。

そっちの方がよっぽど臭いんだよ。

人の浮氣を疑つてる暇なんてないはずだろ？。

あいつ、自分で言つてることわかつてんのか？

香水が臭いとかいつてるけどさ……

あれ、男物の香水の匂いだぜ。

最近の女は、男物も使うのか……つてそんなはずないだろ？。そこまで俺は馬鹿じやないさ。

じゃあ、誰の香水かっていうのは……簡単だよな？

ある親子の話

「お母さん、この写真の人って誰？」

「どの写真？」

「これ。アルバムの三枚目の右上の写真」

「ああ。これは母さんの古い友達だよ」

「友達？ ジヤあ、なんでこの人がたくさん映つてるの？」

「それはね、お母さんは、お前を産んだ後体調が優れなかつたんだよ」

「お母さんの代わりにお母さんしてたの？」

「何だか変な言い方をする子だねえ」

「良くなるまで、その人に預かつてもらつてたんだよ

「……お母さんって、本当のお母さん？」

「ひ。この子は何馬鹿なこと言つんだい？　あたしが産んだに決まつてゐるよ」

「本当に？」

「まつたくしつこねえ。そんなこと言つてゐる暇あるんなら、宿題しない

「はあー」

あはは。お母さんに怒られちゃつた。

お母さんにはそんなに仲のいい友達がいたんだね。
本当のお母さんは、お母さんに決まつてゐるじゃない。
ちょっと退屈だつたから、からかつただけなのにな。
そんなにムキにならなくたつていいのにな。

あ、あたしの遊びに乗つてくれたのかな。

本気になつた振りしてくれたみたいだつたし。

洗つてる食器落とすなんて、お母さんも演技うまいね。
ねえ、びっくりした？　真剣な顔とか久しぶりにしたなあ。
驚かせて、怒らせちゃつた……あたしつて演技うまいでしょ？
嘘をつくのもつましいんだあ。

お母さんのこと疑うなんてありえないんだから。

羨ましいなあ。あたしもそんなに仲のいい友達作れるといいなあ。
ねえ、お母さん。私は、お母さんのこと……信じてるからね。

ある親友の話

「やー今日もいい天氣だなあ」

「やつぱり屋上で飯食つのが一番だよな」

「そつそつ。天氣いいと氣分も良くなるしなあ

「そついえばさあ……」

「ん？　なんだよ、お前が口ごもるなんて珍しいじゃんか」

「いや、ちょっとな。良くない噂聞いたからさあ……」

「何だよ、言つてみる。俺が気になるんだけど」

「オレもまさかとは思つてたんだけどな」

「何だよっ。」

「オマエさ、いじめられてるって本当か?」

「はあ?」

「……悪い。オレの聞き間違いだつたか。そんなわけないもんな

「いや、さうじゃなくてさ……」

「さ、飯食つか。パンやろうか?」

「お前や……いつも人の話聞かないよな

「はい? なんだつて? つてことは……」

「お前、俺がいじめられてんの知らなかつたのか?」

「え。オレの聞き間違いじやないのか」

「その噂は本当だよ。とこうか、噂じやなくて事実

「オマエ、大丈夫かよ」

「……何が?」

「色々やられてるんだろう? いじめつていつからこな

「ああ。不幸の手紙とか来たぜ?」

「下駄箱に猫の死骸とか?」

「そうそう。虫とかもな。まったく『気持ち悪い』

「やる奴の気が知れないよなあ」

「そんなんもん知らないでこいつて。どうせ暇つぶしにされてるだけ

だろ」

「ま、そんなどころだらうな」

「やられた側はたまたもんじやないけどなあ

「なあ」

「ん、何だ?」

「オレはさ、オマエのこと……裏切らないからな」

「ああ。そんなの、とつこの昔に知つてるよ。お前が俺を裏切るなんてないってね」

「そうか」

「ああ。長い付き合いだから、信じてるよ」

「それならよかつた」

「さあ。飯食おうぜ？ 休み時間が終わるからね」

「ああ、そうだなあ」

「あいつにはさ、本当に感謝してるよ。昔からいろいろ世話をなってきたし。

いつも笑ってくれるしな。

お前は、嘲笑していたのかもしれないけど。いじめとかさ、本当にやる奴の気がしれないよなあ。

やられる方はさ、じわじわストレスが溜まっていくんだぜ。だんだん、何もかもが嫌になってきて……投げ出したくなる。もちろん俺はそんなことしない。

あいつがいてくれるしな。

……あいつは、俺のことを裏切つたりしないと思ってる。でもさ、何であいつは、俺の下駄箱に猫の死骸があつたのを知ってるんだろうな？

俺がいじめにあつてるとていうのは、最近知つたんだろう？不幸の手紙が来たとはいつたけど、何も下駄箱とはいつてない。実際は家のポストに届いたんだから。死骸は下駄箱に入つてたけどな。

何故あいつは知つてるんだろうな。

……信じてたのは、俺だけだったんだな。

俺たちって、そんなものだつたんだな。

ごめんな。お前のこと……信じてるなんて嘘だ。

この、今の関係を壊したくないんだ。

事実をいったら、もう、戻れないだろう？

偽りの友情でも 壊したくないんだ。それは、あいつも同じだよな。

だから、こうなつてるんだ。

知らない今までいたかつたよ。何も見なかつたことにしたかつた。

でも、俺は忘れないんだ。知つてしまつたから。
あいつが 僕の下駄箱に、猫の死骸を入れてたんだ。微笑みな
がら。

ある双子の姉妹の話

「姉さん、ちょっとといい？」
「ん、どうしたの？」
「あたしさ……姉さんにとって必要なのかな」「佳奈子つたら、その質問するのは何度も？」
「だつて……紗枝姉さんがちゃんと答えてくれないんだもの」「私はいつもちゃんと答えているわよ？ そんなことないって」「全部同じ答えじやない」
「当たり前じやない、本当のことなんだから」「またそーやつて誤魔化そうとするのね」「誤魔化してなんかいないといつてるでしょ?」「何だか納得いかないなあ」「佳奈子こそ、なんでそんなこと聞くのよ?」「だつて、姉さんとあたしつてそつくりじやない?」「だから?」「同じものは一人もいらぬんじやないかなつて……」「またそんなことを言ひ?」「だつて」「佳奈子だつてわかつてるでしょ?」「何が?」「私たちば、双子よ？ 一人で、一人なのよ」「うん」「だから、必要ないなんて」とはないはずよ」「うん。でもあたしは知つてるよ」「知つてるなら訊かなくてもいいでしょ?」「うん。でもあたしは知つてるよ」「知つてるなら訊かなくてもいいでしょ?」

「……考えてみればそうだね」

「考えてから質問した方がいいわ」

双子。自分とそっくりな顔をしたものが、もう一人いるところだと。

この意味が分かる？自分が一人もいるのよ。

そりや、性格とかは違つけれども、見た目なんか瓜二つよ。

どれだけ嫌なことか分かる？

私は私。あの子じゃないの。

いつも回りは比べてばかり。姉と妹。

あの子のほうが、女の子らしいって。

比べてお姉さんのほうは無愛想だねって。

私とあの子を……比較しないで！

いくら似っていても、別のモノなんだから、違つてあたりまえでしょう。

双子なんて関係ない。顔つきも違つていればいいのに。

同じものは、二人も要らないの。

私一人で十分よ。あの子は……私にとつては、いらないの。

あの子は、本当に私が必要にしていると……思つてるのかしら？

何度もしつこく質問してくるけれど。

いい加減答えるのも鬱陶しくなつてきたわ……。

でも、気づいてるとは思うのだけど。だって、佳奈子は言つたじ

やない。

あたしは、知つてるよつてね。

なら、そういうことなのでしょう。

嘘を吐いてるのは……誰だ……？

(後書き)

暇つぶしななつたでしょうか?

それと読めていればいいのですが……

嘘は、吐く方も吐かれる方もあります。なるべくなら、吐かないほうがいいと思いますが……必要な嘘もあるのでしょうか。

お読みください、ありがとうございました。
何かありましたら、どうぞお書きください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7275d/>

騙し合い

2010年10月8日15時20分発行